

ファーム伊達家からのおたより

# ようこそ畠へ

2008年10月20日(火),10月23日(木)VOL.19

【今日も愛子が書きます。先週の続きです。】

私は畠仕事が嫌いでした。ある農家と出会うまでは・・・。

私が子供の頃、父と母は家庭菜園をしていました。子供心に「野菜ばかり作らないで、花とかももっと植えたらいいのに！！」と、両親が汚れた格好で土いじりをしているのが嫌だったことをはっきり覚えています。土、日は必ず家庭菜園なのでどこにも連れて行ってもらえないのも不満でした。

また、歴史の授業で「土・農・工・商」を学んだ時、「農は土の次だから位が高いんだ。でも実際はとても低い地位だった。」と聞いたことを、おぼろげながら記憶していて、それを勝手に現代の農家の人たちにもあてはめていた無知な私でした。

社会人になってから、畠仕事はもちろん、農業と関わることなどほとんどありませんでした。報道で知った「農業は厳しい」「後継者がいない」「93年のお米の大不作」など、農業ってきつい仕事、厳しいなあ、と暗いイメージしか持てませんでした。

こんな私がある農家と出会ったのは、今から12年前の1996年の春のことです。当時は旭川に住んでいました。「旭川市民農業大学」という農業体験講座があり、それに夫が申し込んで二人で参加しましたが、私はしぶしぶついていったというのが正直なところでした。

4月に第1回目の講座があり、その農家に初めておじゃまして、頭をガツンとたたかれたようなショックと刺激を受けました。その時はお米の種まきの作業を手伝わせてもらいました。

「えっ、お米って種まきするんだ。」

毎年5月中旬頃、テレビなどで「今年も田植えが始まりました。」というニュースを目にしていたので、米作りは田植えから始まるものとなんとなく思い込んでいたのです。ところが、実際は田植えの前

には種まきがあり、その前には種もみの準備があるのです。

お米の種まきは、育苗トレイに機械を使って土、種もみ、土を入れていき、そのトレイをビニールハウスに運び、並べていく、という作業でした。家族全員が力をあわせて、丁寧に作業している姿が、感動を超えて驚きました。この体験をとおして、大嫌いだった家庭菜園ではあったけど、身近に畑があり、畑のことは知っているつもりだった自分が、実は何一つ知らないことがわかり、ショックだったのです。野菜の種、花、種類、育ち方、育て方など、さっぱりわかるじゃないじゃないか、と。

夫にしぶしぶついて行った私でしたが、この体験により、農業に興味が湧いてきて、次の講座がとても待ち遠しく感じられました。しかし、その時は自分が農家になるなんて、夢にも思わなかった、愛子25歳（若い！）の春でした。（つづく）

### 【畑のようす】

ほとんどの野菜の収穫が終わり、片付けを進めています。収穫を終えて枯れているトウモロコシを刈り倒したり、きゅうりのネットを片付けたり、今月中にある程度メドをつけるべく、頑張っていきます。

## 伊達家の食卓

### 【白菜】

鍋には欠かせない白菜。「野崎2号」という固定種です。7月に種まきをして、今収穫の時期を迎えました。